

前近代日本の史料遺産プロジェクト  
研究集会報告集 2001-2002

Japan Memory Project Conference Proceedings  
Academic Year 2001-2002

2003年3月31日

中核的研究拠点形成プログラム  
前近代日本の史料遺産プロジェクト

東京大学史料編纂所

COE

Japan Memory Project

Historiographical Institute (*Shiryō Hensan-jo*)  
The University of Tokyo

前近代日本の史料遺産プロジェクト研究集会報告集 2001-2002 (東京大学史料編纂所) 抜刷

## 日本中世の臨終行事

—特に源信以降—

Jacqueline Stone

## 日本中世の臨終行事 - 特に源信以降 -

Jacqueline Stone

第2回国際研究集会で発表させていただき、まことに光栄と思います。

平安時代の後半より鎌倉・室町時代にかけて、死に対してどう臨むべきか、僧侶及び貴族の間で初めて重視されるようになったことは承知のとおりです。中世人の宗教的想像では、臨終、つまり人生の最後の瞬間は、普通の原因結果、日常的道德や宗教的行為を越えた全く別な次元とされ、そのときに心を正しくして、仏を静かに観念することさえすれば、どんな罪深い人でも臨終正念できて、それによって生死の苦しみを永遠に避け、往生することもできると広く信じられていました。逆に、どんなに信心強く、善根を多く積んできた人でも、もし最後の瞬間に妄想や雑念が起こったら、それだけで一生の仏道修行の功德をなくしてしまい、悪道に墮ちるおそれもありました。そういう意味で、臨終とは救済の上で無限な可能性、同時に危険性もはらんだ瞬間とされていました。

自然に自分の死ぬ日を前もって知って、弟子や家族たちに告げ、体を清めて服を着がえ、西に向かって端座し、念仏を唱えながら安らかに死を迎えた僧・尼・男・女の理想的な死に方の例が、平安後半から鎌倉中期にかけて編纂された「往生伝」にたくさん出てきます。しかし、そういう理想的なイメージを別にして、死に臨むときに怒ったり、恐れったり、精神感乱や前後不覚になったりする場合もあったでしょう。それを実際問題として取り組み、一生一大事とされた臨終のことを儀式の上でコントロールしようとするのは、臨終行儀でした。日本の臨終行儀の文献は、平安時代の後半から江戸時代中まで各宗派に編纂されてきましたが、創造的発展の主な時期は平安の後半から鎌倉中まででした。中世で言う「臨終正念」に基づいた実践と思想についての研究プロジェクトの一部として、ここでは中世の臨終行儀をどう発展してきたのか少しでも明らかにすることを目指したいと思います。

日本における臨終行儀が正式に始まったのは、源信(942-1017)の「往生要集」からということはいうまでもありません。資料の第1を参考にしてください。これは有名な「往生要集」巻中末の「臨終行儀」のところですが、ここに源信は、唐時代の道宣(596-667)、善導(613-687)、道綽(562-645)などの書物を引用し、死にかけている者の扱い方と死を迎える者の心構えが述べられています。

インドの祇園精舎で行われたとされる慣習に従って、病人を無常院という別な建物に移すべきとされ、それは自分の僧房に残ってなじみのある衣、鉢などを見ると執着の念が起こるからです。無常院で仏像を安置し、病人をその仏像の後ろに置き、仏像の手につながった五色の糸を握らせる。病人は西のほうに向かって念仏を唱えながら、阿弥陀仏とその聖衆に伴っての来迎の姿を観相すべしとある。看護人は、香を焚き、花を散らし、もし大小便、嘔吐、つばきを吐くことがあれば、すぐそれを取り除く。親戚、眷属などが見舞いに来たら、病人の正念を感わさないよう、酒を飲んだり、五辛を食べている人に近づくことを禁止すべきです。

病人の体が「断末魔の風」という最後の苦しみにさいなまれたときに、正念を続けるのはとても困難になりますから、死に臨んでいる人に十念を成させることは何よりも大事なことです。「十念」とは、第十八願の中で阿弥陀仏のことを十念ほど思う衆生は必ずその極楽という阿弥陀の浄土に生まれるということをも指し、そして、悪人でさえ臨終のときに善知識に会い、その教えに従って南無阿弥陀仏を唱えて十念を具足すれば、その念ごとに

八十億劫の生死の罪も消え、往生も決定するという「観無量寿経」の「下品下生」の節をも指す。それは末木文美士先生のけさちょっと触れているところですが、「往生要集」によって説明された臨終行儀は、源信を中心に構成された比叡山・横川の二十五三昧会という結社の中で早くから行われたということは有名です。

「往生要集」は、源信以降、多くの臨終行儀文献の手本となりました。大まかに言えば、源信とその中国の先徳の戒めに従って、病人を無常院や別な部屋に移し、そこに安置された仏像の手にかけた五色の幡を持たせ、香を焚いて、花をまき、病人が心正しく集中できるよう世間的な話を禁止し、静かにして荘厳な雰囲気をつくることが重視されています。と同時に、新しい発展も見られます。その発展の特質を3点で要約してみようと思います。

一つ目として、宗派の境界線を越えての吸収。

「往生要集」に述べられた臨終行儀は、源信の天台浄土教に限られず、各宗派の教義や修行の上で吸収されていました。例えば法相宗興福寺の僧・湛秀の「臨終行儀注記」では、阿弥陀仏の極楽浄土より兜率天に往生を願う人の場合、阿弥陀の仏像のかわりに弥勒菩薩像を安置すべきとされています。病人のためにいつも菩薩戒を誦して聞かすべきことも勧められています。死が間近に見えない限り、法華経を持経者に病人のために講じてもらったり、または同侶に大般若経の理趣分をも読んでもらうこともよい、と。そして、湛秀は臨終正念を守ってくださるよう頼りにできる諸尊は阿弥陀仏だけではなく、釈尊、弥勒、薬師、普賢、文殊、地藏、虚空蔵、観音、不動などとしします。

湛秀と同じく法相宗の解脱房貞慶(1153-1213)のものとした「臨終之用意」に、「念仏を唱ふ」よりも「神呪を唱ふ」という言葉を使って「南無阿弥陀仏」に陀羅尼を置きかえています。

密教の場合、修行の目的は往生というよりも即身成仏ですから、「秘密念仏」の流れの中で、代表者である実範(?-1144)、覚鑿(1095-1143)、道範(1178-1252)などは、臨終の念仏を三密加持という意味で解釈し、それにより行者が大日如来との一体性を最期の瞬間でも感得できるという。特に覚鑿のものとしてきた「一期大要秘密集」では、臨終の場面それ自体が曼陀羅の形で配列され、病人は中央の大日如来の位置に当てはめられ、その周囲に4人ぐらいの友が位置され、ともに五仏の智慧を象徴するとされています。

言われる新仏教の中にも専修念仏を中心に行われた臨終行儀もありました。法然の孫弟子である良忠(1199-1287)の「看病用心抄」はその一例です。新仏教と旧仏教とでは、教義の面から考えれば大部違いがあるでしょうが、臨終行儀を見るときは共通したところは著しいです。

二つ目、特別な臨終知識の生産。

源信以降の臨終行儀の文献の中に、「往生要集」の基本的な戒めはますます複雑になり、子細に解釈されてきます。例えば無常院に病人を移動させることはどういう意味を持つか、詳しく説明されています。「一期大要秘密集」に、無常院に移るのは、この娑婆世界を捨てて極楽へ生まれようとするをあらわし、釈尊の王城を出て悟りを求め、空海の永久の三昧に入ると同じようなことであり、もし本人が今まで出家していないとすれば、今こそ遺言を告げ、財産を伝え、家族の人々と別れ、すぐ剃髪すべしとある。そして、無常院で安置された仏像は西に向かうべきか東に向かうべきか、病人が仏像の前に置かれるべきか

後ろに置かれるべきか、それぞれがどんな意義をあらわすかなど、詳しく説明されています。仏像の手にかけた五色の幡についても、その長さ、準備の仕方、病人のどちらの手で握らすべきかなども細かく述べられています。覚鑿によると、その長さは1丈2尺であるべきとされ、そして、覚鑿のものとして伝わってきた「孝養集」 - 実は鎌倉時代のもの - でしょう。そこでは、五色の糸の製作について、80歳に近い女性に、その麻を清らかな場所でさらし、聖のような人に青・黄・赤・白・黒の五色に染めさせ、灌頂の受けた人の監督のもとでやらせ、世間の人々に見せないようにと述べられています。こういうような細かい教えを通して、臨終行儀に対する特別な専門的な知識がどんどん生じたのは注目すべきです。

### 3番目は善知識の専門化と責任。

一般的に仏教で言う知識、正式に善知識とは、教えを説いて導いてくれる人を指すのですが、臨終の場合では、死にかけている人のそばに残って激励してくれ、臨終の儀式を担当する人を意味するようになりました。源信以降の臨終行儀の文献を年代順に読むと、時を下がれば下がるほど、死に臨んでいる人は、往生のことに成功するかどうかは、その人自身の臨終修行で決まるというよりは、儀式の専門家としての知識がますます大事な役割と見られたことが決定的になったとはっきりわかります。看病することとともに、死の痛みを負わずに正念が続けられるように病人に正しく教えたり、臨終念仏や神呪の唱えることをリードしたり、魔の働きを防いだり、病人の体の状態から判断して、ほんとうに往生するか、それとも悪道に堕ちるかを見きわめ、場合によっては死後の修法まで行ったりすることなどは、すべて知識の責任となります。この知識の責任について一つ一つにちょっと触れてみたいと思います。

まず、看病。良忠の「看病用心抄」に看病のことが特に詳しく述べられています。良忠によると、看病の人々は香を炊くことで時間をみはからって交替して、互いに休ませるほうがよい。最後の最後まで、一瞬でも病人から目を離してはいけなし、休んでいるときにも病人の呼吸が聞こえるほど近いところで休まなければならない。夜るとき、病人が仏像を明らかに見ることができるよう灯火をともすべきである。病気はいつも夜るときに悪くなりますから、看病が病人の顔をはっきりごらんになれる必要もある。大小便のとき、苦しそうなら、引いて起き上がらせて用をたさせてはいけなし。その不浄なとき、死が間近に見えない限り、仏像と病人の間に屏風を立てておむつを取りかえるほうがよい。良忠は、気難しくて強情な病人をも、また、「魚が食べたい」ようなふさわしくない要求をも、どう取り扱うべきか子細に説明しています。死に臨んでいる人に対して「欲しいものはありませんか」とはとても言うてはいけなしのことです。心が乱れる原因となるからです。

病人のかわりの観念と口称。臨終の修行には、念仏にせよ、ほかの神呪にせよ、必ずとっていいほど何らかの口称が中心となりました。死に臨んでいる人の称えることを最後まで助けてくれるのは知識の第一の責任でした。しかし、本人が精神惑乱や不覚になって唱えられなくなった場合にはどうするか。この問題を初めて明白に認めたのは、管見でいえば覚鑿の「一期大要秘密集」です。

その文献がほんとうに覚鑿のものであるかどうか疑っている学者もいるそうですが、これから検討しなければなりません。一応、資料第2を参考にいただければ、ここで、そうした病人が不覚になったときに、知識たちは病人の呼吸を見て、それに自分の呼吸を

合わせて、最後まで、息吐くごとに念仏を唱えるべし、と。そして、知識は自分の吐き出す息で唱えた念仏を、「南無阿弥陀仏」の六つの悉曇文字となって吸う息で病人の口に入って六つの日輪となり、その光でその人の六根の罪の闇を払うことを観相すべしとあります。ということは、病人は意識が乱れたり、不覚になったりするとき、臨終の口称と観相の責任はすぐ知識のほうに移り、知識の念仏の力でも本人が救われるわけです。

それ以降の臨終行儀の文献では、死に臨んでいる人は、意識が乱れたり不覚になったりした場合に、知識の念仏さえ続けたらそれだけで往生させられる旨が繰り返して述べられています。資料第3、伝貞慶の「臨終之用意」からですが、そこには、本人が亡くなってからも、知識はその耳に神呪をしばらくほど唱え続けるべし、と。悪道に墮ちるべき人でさえ、知識の称名の力でその魂が中有よりも行方を改めて往生させられる、と。そして、資料第4は、良忠の「看病用心抄」からですが、そこにも、病人の息が絶えてからも知識は二、四時間ほど念仏を唱え続けるべきであり、その知識の念仏の力で亡くなった人が中有よりも往生させられる。

魔縁を防ぐこと。「往生要集」に、善導を引用して死に臨んでいる人に罪相、つまり恐ろしい幻想があらわれた場合に、そばにいる人々は、本人の念仏を助けて一緒に懺悔し、その罪は必ず滅すると述べられています。源信以降、臨終のときにあらわれがちな不吉な影響を防ぐという、その知識の責任が拡大されています。

その劇的な例が中世説話にところどころ出てきます。例えば資料第5ですが、「発心集」の一つのエピソードには、ある宮廷の女房は、臨終のときに魔が変形し続けたことに惑わされずに、やっと往生できるよう知識に導かれた様子が子細に描写されています。長いので、読みませんが、とてもおもしろいです。

臨終のときに、もののけの取りつく危険性もあると信じられ、知識は、それをはらえるよう祈祷師としての働きも期待されていました。「一期大要秘密集」には、数人の知識の中に、一人は病人の北東のほうに立って「天魔外道」の妨げを避けるため不動明王を観念して、その呪文である「慈救の呪」を唱え続けるべしと勧められています。臨終のときに、魔縁は阿弥陀仏の来迎の姿までまねをして人をだまそうとするおそれもありました。知識がそのまねの仏をどう見抜くことができるか、資料第6、「孝養集」からですが、なかなかおもしろくて、2行目からです。魔縁の来迎のまねの場合は、その光は左に回る。本物の仏の光は右に回る。「又魔縁は目をふさぎてみれば不見。佛は見え給ふ」。仏の場合は、目を開いても閉じてもはっきり見えるということです。「若をぼつかなき事あらば。能鏡を以て道場の壁にかけて影を寫して見よ。其故は魔縁は人の目をばまどはせ共。己が影を見しらず」。おもしろいことです。西洋でもサターンは影がないという、ちょっと共通したところですが。

死後の修法。知識に死後の修法まで要求された場合もあります。資料第7は「一期大要秘密集」からですが、そこには、臨終のときに死に臨んでいる人のふるまいや体の状態から確認できる地獄に墮ちる十五相、餓鬼道に墮ちる八相、そして畜生道に墮ちる五相を「守護国界主陀羅尼經」に基づいて挙げ、その一つ一つに対して、本人が死んでから三悪道より救うため、知識がすぐ行すべき修法を詳しくリストしています。例えば地獄に墮ちそうな場合、修法として行うことのできることを、最初から6行目ですが、「所謂仏眼・金輪・正観音・地藏等法、可修行之、若絵若造可致供養、又理趣經・五十三仏名・宝篋・尊勝・光明真言・破地獄・宝楼阁・華嚴經菩薩説偈品・法華經等」、と。知識は、死後の修法

としていろいろ頼まれるようです。知識の念仏を唱えることによって、死んだばかりの人の魂が中有よりも往生させられることと同じように、こういう死後に行うべき修法も、知識の責任を臨終行儀より追善供養、または葬式に通ずる次元への延長として考えたらよいでしょう。

以上の臨終行儀の中世的発展を通して、知識はますます臨終の専門家の資格を得たことがはっきり見えます。無限な可能性も危険性をはらんだ最後の瞬間のコントロールは、知識の有験・儀式的な力によるでした。死にかけている人の往生できるかどうかとは、結局的にその本人の修行よりも知識の役割が決定的とされてきました。

だからといって、中世の人々がみんな知識の導きを頂いて亡くなったのかというと、必ずしもそうではなかったでしょう。臨終の行儀及び知識の役割は社会的にどう位置づけられていたのか。寺院の関係を仮定とする「往生要集」や源信を中心に活躍していた二十五三昧会の中で、僧侶同士が互いに知識とし、臨終の念仏を助け合いました。そして、11世紀の初めごろから臨終行儀は貴族階級に受け入れられたことは承知のとおりです。

臨終の知識は、必ずと言っていいほど男性であったと思われます。尼寺で女性は互いに知識とし、臨終正念を助け合うことがあったのか、これから検討すべきところです。女性が臨終の知識としての役割を果たした、そういう例を見つけたらぜひ教えていただきたいんです。探しています。

知識は僧侶でなければならないかという、必ずしもそうではなかったです。「孝養集」には、鎌倉時代の文献ですが、その中に、知識としては臨終のことを心得ていない僧よりも心得た在家の人のほうがよい、と。言われる念仏結社の中で、在家の信者が互いに最後の念仏を助けたことが十分に考えられます。しかし、「一期大要秘密集」に見えるよう、密教的な修法まで期待された場合、知識はやはり僧、聖などでなければならなかったのです。そして、有名な阿闍梨のような僧を知識として頼めば、それとも知識を一人ばかりでなく、多くの臨終行儀文献に勧められているとおりの三人、また五人まで頼めば、経済的な面も考えなければなりません。このことについて、「孝養集」には、「(かねてより)此人人を常に吉き物を供養して丁寧にあたれ……此時(臨終)の料なり」と触られているぐらいです。

武士の間で、貴族文化の一部として臨終行儀も採用し始めたのは鎌倉中期からであったと、今井雅晴先生から前の指摘です。しかし、臨終行儀が武士の間で採用されたことについて、武士が特に救われにくい「悪人」としての意識が高まっていました。それに関して、時宗の祖師・一遍の後継者・他阿弥陀仏真教についての Jonathan Todd Brown 氏の最近の研究があります。真教が関東の武士に対して、「殺生することを職業としている君たちは、どれほど罪深くて往生しがたいものか。そのためにこそ時宗の地域道場をつくってくださったら、あなたの臨終のときに時宗の知識が必ずおそばに急いで導いてくれるから、どれほどありがたいのか」という旨を説法して、多くの武士に帰依をいただき、関東での教団の基盤をつくり上げた Brown 氏は指摘しました。

そして、武士が戦場に出たとき、自分が殺されたその瞬間に念仏を唱えることもできず、往生もできないままに悪道に堕ちるといっておそれも生じました。そのおそれに対応するため、鎌倉末期・室町時代に従軍する「陣僧」が出ました。陣僧とは、檀越の武士を戦場まで伴い、戦いの前に「十念を授ける」ものでした。十念を授けるとは、一つの吐き出す息で「南無阿弥陀仏」を十遍唱えることであり、臨終行儀をとっても凝縮した形で行うことと

して考えてもよいでしょう。

江戸時代になると、臨終行儀は各社会階級に浸透してきました。葬式や追善供養の常の儀式と同じよう、僧の檀家のためにお決まりに行ってくれた宗教的サービスの一つとなったようです。

終わりに、結論にはなりませんけど、結論のかわりに結びというか。臨終行儀が近世を通して行われてきたことは間違いありません。しかし、近世では臨終正念は中世ほど重視されていなかったようです。これはなぜか、これから検討する余地が十分にありますが、推量の段階でいろいろ考えられます。近世の宗教は、中世より現実肯定的になったとはよく言われていますが、近世以前にもいろんな要素が絡んで、臨終行儀の形式化に貢献したと思われま。中世を通して臨終の知識の専門化はその一つであり、そして、15世紀の末、16世紀ごろからはやり始めた在家の葬式もその一つではなかったのかと思います。ということは、死後の運命を儀式の力により影響を与えようとする場合、力点と宗教的エネルギーが死に臨んでいる人自身の臨終正念というより、導いてくれる知識の働きのほうへ、そして臨終行儀それ自体より葬式のほうに次第に移ったということ、一応、仮説として立てることができると思います。

それでは、以上、終わらせていただきます。(拍手)



ジャクリン・ストーン

④

四分律鈔瞻病送終篇引中國本傳云、祇洹西北角、日光沒處爲無常院、若有病者安置在中、以凡生貪染、見本房內衣鉢、多生戀著、無心厭背、故制令至別處、堂號無常、來者極多、還反一二、即事而求、專心念法、其堂中置一立像、金薄塗之、面向西方、其像右手舉、左手中繫一五綵幡、脚垂曳地、當安病者、在像之後、左手執幡脚、作從佛往、佛淨刹之意、瞻病者燒香散華莊嚴病者、乃至若有屎尿吐唾、隨有除之、或說佛像向東、病者在、前若無別處、則令病者面向西方、燒香散華、道和尚云、行者等若病不病、欲命終時、一依上念佛三昧法、正當身心迴面向西、心亦專注觀想阿彌陀佛、心口相應聲聲莫絕、決定作往生想、華臺聖衆來迎接、病人若見前境、則向看病人說、既聞說已、即依說錄記、又病人若不能語、看病必須數數問病人、見何境界、若說罪相、傍人即爲念佛、助同懺悔、必令罪滅、若得罪滅、華臺聖衆應念現前、準前鈔記、又行者等眷屬六親若來看病、勿令有食、酒肉五辛入、若有必不得向病人邊、即失正念、鬼神交亂、病人狂死、墮三惡道、願行者等、好自謹慎、奉持佛教、同作見佛因緣、已上、作往生想迎接、其理可然、如大論說神變作意云、取地相多故、履水如地、取水相多故、入地如水、取火相多故、身出烟火等云、明知於所求事、取彼相時、能助其事而得成就、非唯臨終尋常準之、綽和尚云、十念相續似若

不難、然諸凡夫、心如野馬、識劇、猿猴、馳騁六塵、何曾停息、各須宜致信心、豫自剋念、使積習成性、善根堅固也、如佛告大王、人積善行、死無惡念、如樹先傾、倒必隨曲也、若刀風一至、百苦凌身、若習先不在、懷念何可辨、各宜同志三五預結、言要、臨命終時、送相開曉、爲稱彌陀名號、願生極樂、聲聲相次、使成十念、已上

②

一期大要秘密集

若病苦逼身、不知東西、當臥頭北而

西一摩水破、心不辨、善惡、手令合掌、而可、向、仏、又無記、既現、無分別心、陰魄一殘、猶如熟眠、余氣纔通、宛似死人、若當此時、見出入息、自不暫捨、以病者息延促、合知識、息延促、病者與知識、出入息於同時、必每出息、合唱念仏、我代助我、往生深德、一日二日、乃至七日、斯息爲期、捨不得去、人死作法、必出息終、待終、度息、當欲唱念、若得唱念、消滅四重五逆等罪、必得往生、極樂世界、所以者何、病者斷余氣、虛捨命、時知識呼彌陀、實請利生、本願趣緣、必垂引接、又當觀念、從口唱出、六字、病者從引息、即入病者口、皆現日輪相、各出六根、放紅顏梨光、破六根罪障、闍、此時病者無始以來、生死長夜、闇喑、見日想、深獲更問、即得往生、經說、五逆罪人若遇知識、將得往生、斯之謂歟、若我住正念、知識必何用、現邪念無記、當助彼時、吉

③

臨終之用意

はかりも耳に唱へいるへきなり、おもては死する様なれとも、そこには心あり、或は魂さりやらすして、死人のほとりにおいて、稱名をさしぬれば、かれ惡道に入へざるものなれ共、中有よりあらためて淨土に生るる也。

④

看病用心鈔

よと念佛たかく申させ給へ、たとひわれと口稱にあはすとも、高聲に縁せられて、意念へたかふまじきか故なり、又いきたえ、事されぬれへとて、物さへかしき事、ゆめあるまじく候、たゞ猶々も心をすまして、念佛を申させ給ひて、一二時の程もすこさせ給へ、又この功をもて、中有よりも往生を上げよと、心をいたして、廻向しませすへ候

或女房臨終見魔變事

或宮殿ノ女房世ヲ背ケルアリケリ。病ヲウケテ限ナリケル時。善知識ニアル聖ヲヨビタリケレバ。念佛スヌル程ニ此人色マサヲニナリテ。恐レタル氣色ナリ。アヤシミテイカナル事ノ目ニ見ヘ給ソト問ヘハ。ソノシメテイカナル事ノ目ニ見ヘ給ソト問ヘハ。ソノシメテイカナル事ノ目ニ見ヘ給ソト問ヘハ。...

一期大要秘密集

守護國界陀羅尼經云。若人命終。當墮地獄中有十五相。經云。一者於自夫妻男女眷屬。惡眼。瞋視。二者拳其兩手。捫拳虛空。三者善知識教不相隨順。四者悲号啼泣。咽流淚。五者大小便利。不覺不知。六者閉目不開。七者常覆頭面。八者側臥飲噉。九者口臭穢。十者脚膝戰掉。十一鼻梁欹側。十二左眼嚙動。十三兩目變赤。十四仆面而臥。十五跪身左脇著地而臥。已上十五相。隨一現在前。取於死畢。必知墮在。一百四十四地獄等之中。既知生處。精濟彼苦。所謂仏眼。金輪。正觀音。地藏等法。可修行之。若給若造可致供養。又理趣經。五十三仙名。寶篋。尊勝。光明真言。破地獄。寶篋閣。華嚴經。菩薩說偈品。法華經等。已上三宝。殊濟地獄衆生苦患。本誓悲願功力勝。余也。

孝養集

魔縁

佛のまねをして我身心をたぶらかすと云り。其を見分る様は。魔縁の光は左に廻る。佛の光は右に廻る。又魔縁は目をよさぎて見れば不見。佛は見え給ふ。若をばつかなき事あらば。能鏡を以て道場の壁にかけて影を寫して見よ。其故は魔縁は人の目とばまごはせ共。己が影を見しらす。せめて鏡なくば水をたへて見よとなり。

復人臨命終時。有八種之相。必墮餓魔羅界餓鬼趣中。經云。一者好舐其唇。二者身熱。如火。三者常患飢渴。好說飲食。四者張口不合。五者兩目乾枯如鴨。孔雀。六者無有小便大便遺漏。七者右膝先冷。八者右手常拳。何以故。心懷慳吝。已上八相中。隨一現前。必知墮在。三十六種餓鬼界中。既知生處。精濟彼苦。所謂寶生如來。虛空藏。地藏。千手。檀波羅蜜菩薩。施餓鬼等法。可奉修之。又五十三仙名等。甘露呪。雨宝陀羅尼經等。奉念之。可迴向。又可致施行。又可供養自恣之。已上三宝殊濟餓鬼苦患難忍。本誓悲願功力勝。余也。

又墮在畜生道。有五種相。經云。一者愛惡妻子。貪視不捨。二者躑手足指。三者遍体流汗。四者出膿液。五者口中呌沫。已上五相中。隨一現前。必知墮在。七類畜生。既知生處。精濟彼苦。所謂阿彌陀如來。般若波羅蜜菩薩。文殊師利菩薩。金剛燈菩薩。馬頭觀音可修行之。又五十三仙名等。光明真言。理趣般若。般若心經。光讚般若經等。奉念之。可迴向。已上三宝殊濟畜生。本誓悲願功力勝。余也。

若三惡道相。同時相雜。或都不知何相。所謂滅惡趣護摩秘法。急急行之。早早濟之。我閉眼尅。若見惡相。且入忠孝之心。且出慈悲之門。速植追修之善根。疾授菩提之菓實。從婆病惱。猶難堪。阿鼻罪苦。何易忍。努力努力勿違。遺言。濟我令成。道還必導。汝等一行。普賢行願。同証無上道。